

時代小説自選集 第八卷

由比正雪 下

おぼろ駕籠

丹前屏風

大佛次郎

おきろぞじ　ろうじだいしやうせつじせんしやう
大佛次郎時代小説自選集

第八卷

ゆ　いしやうせつ
由比正雪(下)・おぼろ駕籠・丹前屏風
かご　たんぜんびやうぶ

昭和四十五年十一月十日　第一刷

定価　八〇〇円

著　者　大　佛　次　郎

発行者　二　宮　信　親

発行所　読　売　新　聞　社

郵便番号一〇四　東京都中央区銀座三の二の一

”　”　五三〇　大阪市北区野崎町七七

”　”　八〇二　北九州市小倉区明和町一の一

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　協和製本株式会社

目次

由比正雪 下……………三

おぼろ駕籠……………一四九

丹前屏風……………三三五

装丁・題
見返し絵
佐中
多村
芳岳
郎陵

由
比
正
雪
(下)

秋 晴 れ

頼宣が無言でいるから兵庫もだまって馬を進めて行く。頼宣がどこへ行こうとしているのかさえ、兵庫は知らないのだった。

からつと、よく晴れ渡った秋の朝だった。この山路も木々が秋の彩りを見せて、眩^{くら}ゆいくらい明るかった。風のあたるところにある木々は早くも葉を落して、透いた枝に光を受けている。山蔭にある木々は今がさかりの紅葉で、まるで燃えるように照り映えている。後の山の峽^がからのぞいている紀の川の流域の一部も、礮^かを歩いてゐる豆粒のような人間がかぞえられるくらい明るいのだ。二人は、雑木林の中で焚^{たき}木を拾っていた村の子供たちを驚かせ、草の中に隠れていた山の鳥を起たせながら、なお奥深く登って行くのだった。

頼宣が振返つて、来いというように目を動かしてから、兵庫は馬をいそがせて、狭い道に主人と並んで進むようにした。

頼宣は何か話し出そうとしているようだったが、また口をかく結んでしまった。

「兵庫」

「は」

「そちは由比正雪をどう思うか？」

質問がちよつと唐突すぎたので、兵庫は、すぐに答えるわけには行かなかった。頼宣はこれにかぶせるようにいった。

「あの男を頼みになる人間と思うか、どうかだ？」

「その儀は……」

と、兵庫は、熱心に答えた。

頼宣は、相変らず馬をやりながらにこりともしないで、聞いているのだった。馬の動作につれて、大きな軀がゆるく規則的なりズムをとつて揺れているのである。雑木の枝が道の上に出ていて、肩をかすつたのを手を伸ばして、小枝を折っただけである。

「うむ」

「……………」

「面白い奴よ。あれは私に、公儀に謀叛^{ひそな}しろとすすめたぞ。どうだ、兵庫」

頼宣の節の太い指の中で、小枝が音をたてて折れた。それは、兵庫が馬をすすめて行く石道の上へ捨てられた。

「おれは最初からそのつもりでおった」

こう頼宣はうめくようにいい放った。

「どうせおとなしくしておつても亡ぼされるのだ。そのくらいならば、こちらからやる……俺れの覚悟はこれだ。誰が、おのれの墓穴が掘られて行くのを、のめめと眺めて待っている奴があるか？ あべこべに奴等を突き落してやろう。俺は弱虫になりたくない。卑怯者^{ひきょうもの}になりたくない」

ははははは……と、爆発するように頼宣は笑い出した。その

大きな声は、枝のすいたしんとした山に、奥深く反響を呼んでいた。

「兵庫」

「は」

「そちに頼むぞ。これを打明けたのは貴様が皮切りじゃ。彦右衛門にもまだ話していない。丹後にもいってない」

「殿」

兵庫は単純に涙ぐんでいるのだった。頼宣は、特徴のある荒々しい目付で、これを見詰めてから、急に冷酷というのに近い硬い表情に戻り、

「が、正雪の奴は別じゃ」

といい出していた。

「あれは、私に、一札書けといった。味方を集めるのに是非ともそうせねばならぬというのだ。しかし、これは、……」

「……………」

「俺れは嫌いだ。よいか、聞けよ、兵庫。……たかが浪人風情のかれが！ 無礼ではないか」

こういつてから、口を難しく結んで、黙り込んだ。主従は、羽虫が飛んでいる明るい空間を見詰めながら、暫く自分たちの馬のゆるい蹄の音を聞いているだけだった。

兵庫は頼宣の駄々っ児といってもよいように我儘な気性を知っているし、またそのためにこの主人に一層執着を感じているのだった。こういつて、勿体ないことだが、何か世間的には不足して

いる君を自分たちの努力で、補うようにして立てているという自覚は家来として楽しいものだった。そのために死ぬことがあっても、これは本望なのだ。そればかりではない。お墨付を望む正雪の立場には充分同情していながら、まだ自分ほど正雪を知っていない頼宣が、滅多に正雪を信用出来ずにいるというのも無理はないと思うのだった。そのお墨付が万一公儀の手に渡るようなことがあったら、どうなることか？ この恐ろしい危険のことも考えられるのだった。

「然しながら……」

と、兵庫はおそるおそる言った。

「正雪めを手撫てなけておくことは、何かと御便利なのでは御座りませぬか？」

こう言った家来を、頼宣は鋭い目で見返ったが、なお不機嫌らしく沈黙を守っていて、

「すれば、そちも、余が何か書かねばならぬと申すのか？」

と、言った。

兵庫はこれに抗議しようとした。決してそうは考えない、何か別の方法でと思うのである。しかし、頼宣は案外に機嫌よく笑顔になっていて、かぶせるように言い出していた。

「それとも、そちが俺れの代りに万事引受けるか喃？」

「は？」

何の意味か、これは、ちょっと呑み込めなかったのである。兵庫が見ると、頼宣は注意深く兵庫の顔を見詰めていた視線を急に

そらせて、道の背後の方を振返っていた。雑木林の中は色づいた葉が日を受けて、輝いているだけである。その外はあおく澄み渡った空で、山の午後は深閑としているだけである。頼宣はまた兵庫の顔を見返った。

「兵庫」

「は」

「正雪のことは、そちらが引受けるか」

「と、仰せられますのは？」

「そちの手で、余の墨付を正雪に取らすのだ。余は筆を取らぬ。

しかし、虎の印を押そう」

と頼宣は、事もなげにいい放った。

「というのは、万一の際は、そちが一存のこととして、そちの命をおれにくれというのだ」

「……………」

兵庫は、はっとしていた。——これだ、御主君はこれを仰せ出されようとして今日おれをこまでお連れになったのだ。

正雪には、頼宣のものとして墨付を渡す。万一の際は、それが偽物だったとして、公儀の手前は兵庫一人が責任を被る。

「そちの申すとおり、余も正雪を放したくないと思っている。正雪というよりも、かれが手撫けておる諸国の浪人共がおれに入用なのだ。が、墨付のことは喃……それが已むを得ぬものとすれば、その方法で、そちに取計って貰うよりほかはない……おれは好まぬところだ。しかし、まったく、已むを得ぬものとすれば

だ。……反古だと思つて、やってもよい。どうだ、そちが如何様にも、取計ってくれるか？」

数弥は牢から引出されたので、これは、いよいよやられる時が来たと思つた。外へ出るのは久しぶりだし、これはまた素晴らしい好い天気だった。こんな日に死ぬるのは有難いことだと思ひながら、やはり死ぬのはあまり有難いことではなかった。数弥は考へた——これが右を見ても左を見ても敵の中から、斬られるとわかつて案外平気でいられるのだ。そんな意地を抜かしてたった一人でいることだったら、どうだろう。——正直な話、これは耐え難いことなのだ。何といつても一番考えられるのは時江のことだった。数弥は時江が何かでこへ来るとまで考へた。この考へは、それだけで感動させられるものだった。そんなことが有りようもないのは倅せなことだ。とにかく、この他人ばかりの中ではこの世に何の未練もないような顔をして死ぬことが出来るのだった。

ところが、殺すでもないらしかった。足輕たちが寄つて来て、左右から抑えつけたと思うと、肌を脱がされた。何をされるのかわからなかったけれども反抗しかけると、恐ろしく力のある奴でぐっと抑えられて自由がきかない。そこへ役人の一人がそのまま、地面へ腹ばいになれというのだった。

「何をするのだ？」

・数弥は、話によっては断じて肯くまいというような顔色だった。役人は面倒だと思つたらしくこれには何とも答えない。あごを動かすと足軽たちが加勢して、力ずくで数弥をねじ伏せた。脚を引張る奴がある。腕も抜けそうに左右から引張られた。胸と腹を地面につけて裸かの背をさらして烏賊のように平らに伸ばされたのだ。これは背中へ入墨をするためだった。最初から変な奴がいると不審に思つた町人風の男が刺青師だったのである。この男が数弥に馬乗りになって、針を刺し初めた。

抵抗しても駄目だとわかつてから、数弥は歯を喰いしばつて呻き声一つ立てなかつた。その苦痛や口惜しさは別として。変なことをするものだと思われた。手術は半刻ばかりの内に済んだ。

何を彫り込んだのかも、背中のことだから、わからなかつた。尋ねても無駄だろう。されるとおりになつてもとの牢屋へ戻つて来ただけだ。背中一面が火を背負っているようにひりひり痛むのだ。

牢番が出て行つて終うと、隣から壁をこつこつ叩いて話掛けて来た。

「何しに行つたんだ？」

「わからない、背中へ入墨をされたんだ」

「入墨を？」

隣にいる囚人も不思議に思つたようである。

「何を彫つたんだ」

「それがわからない……」

と数弥は答えた。

「一体、これから仕置きにしようという人間に、一々こんなことをするのか？」

隣では考え込んだように、やや暫くだまり込んでいたが、「そんなことは聞いたことがない」

と答えて来た。

「ひょつとすると、お前さん、命だけは助かることになつたんだ」数弥が今度は暫くだまり込む番だった。そんなことがあるだろうか？ 隠密は斬られるのが定法だ。

「どこか、人足寄場へやられるんだ」

と、隣からまたいった。

「しかし、背中だつて？」

「そうだ、背中だ」

「そりゃアまた、おかしい——入墨なら、たいてい腕だが……」そうだ。人足の逃亡を防ぐための入墨ならば額か腕の見えるところにする筈なのだ。数弥は何を書いてあるのか急に知りたくなつた。

それから外に來たのをつかまえて尋ねてみた。牢番の者も笑うだけで答えてくれないのである。

牢屋敷の門から、少しはなれたところに露地がある。男はさつきからそこに立っている。かなり大きな体格の、立派な風采の侍

だが、この暖かい日和に頭巾をかぶっている。頭巾の蔭にある大きな目が、絶えず牢屋敷の門の出入りに気を配っている、はなれるかと思うと、またそこへ戻って、油断のない様子である。

一度家中の侍がその前を通って、不思議そうに見えて、それが誰かと気がつく、驚いたようにうやうやしくお辞儀をして立ち去った。頭巾をかぶった男は、あきらかに当惑を感じたような様子である。思い切って歩き出そうとして、また思い止ったようなところも見える。目付にいらいらしたような色が漂った。

やがて牢屋敷の門から、今日よばれて行った刺青師が門番にお辞儀をして出て来た。それを見るとこの男は躊躇なく往来へ出て来た。

刺青師は人のいない河岸縁で呼び止められていた。

「たずねたいことがある」

と、侍は頭巾のままいうのだった。

「ほかのこともないが、今日そちが牢屋敷へ呼ばれて行ったのは、囚人の若い男の背に豆州家来と彫るためであったか？」

「へ……？」

刺青師はこのことは他言ならぬと、きびしくいい付かっていたのだが、相手がこのことを知っていたので、

「左様で御座います」

答えると、その男は頭巾の蔭で笑って、

「そのとおりなのだ」

と、念入りにいい、

「いや、宜しい」

といって、刺青師を放した。刺青師が何のことかと、きょとんとしている間に男はすたすた歩いて行くのだった。やがて、その後ろ姿は辻を曲って見えなくなっていた。

頭巾をかぶった侍は、それだけ聞くのがこれまで汚い露地口に立っていた用件だったように、明るい往来を道を急いでいる。町は漸く屋敷ばかりあるところへ出ていく。その一軒の黒い門を潜って入ると、庭口の木戸を押した。

「や、帰られた」

こういう声が、その庭に向いた奥の書院から聞こえて立って来た者がある。そのほかに三人の男が主人らしい客と、同時に振返ったのが小暗い座敷の奥に見えた。

「如何でした？」

と、立って縁へ出て来た男がいう。

「いや、やったそうだ」

というのが返事だった。

「噂だけではなかったのだな」

暗い呟きである。迎えた者もおさえつけられたように無言でいる。

その中から、一人が、

「そうだとすれば……」

といいだして座を見廻した。

「われわれも思い切ってやらねばならぬ。お家のためなのだ」

「そうだ、無論のことだ、しかし、陸路を取るか、船で送るか……船だとすると、これは面倒だぞ」

と、別の男が、睨むような目付でいって、ほかの者の注意を集めた。

「ひょっとこれは……船にするのではないかな」

一座が黙って顔を見合せた時に、庭に咲いている木犀の花の香が静かに漂い寄って来た。

一人が、組んでいた腕を解いて、

「左様なことは、今更、問題ではない」

と、烈しくいい出していった。

「海路を送るとしても、船へ積み込むまでに何とか出来るだろう、そうしなければならぬのだ」

「しかし、こちらの方の話のとおりだとすると、由比正雪の方も警戒せねばならぬ。むしろこの方が容易ならぬことなのだから」

こういったのは、牢屋敷の見張りに立っていて戻って来た男である。

「お墨付という奴か？」

こう言われて、暗い顔きようである。

「しかし、真逆なあ、それまでに御軽率のことはあるまい」という者があった。

「そう、そう。拙者もそう思う。何せ、相手はたかがどこの者とも知れぬ浪人者だ」

「ところがそうでない。お屋形さまは浪人者が御墨貫じゃ。どこの国に、譜代の者を差置いて、軍の総旗を新規召抱えの者にお預けになる大名が御座ろうか？ 万事がその伝……とすれば、正雪のことも、どっちとも知れたものではない。それは別としても、このことは事柄からして容易ならぬことだ。それでなくても御公儀が何かないかと鵜の目鷹の目で見張っていられる御当国のことだ。ただ危ない哉では済まされぬ。何も事実左様なお振舞いがあつたかどうかなどは今更詮索している時では御座らぬ」

これは白髪頭の、実直らしい老人の口から出た言葉であつた。「お家を大切に心得るならば、遠慮は無用だ。民部を刺して禍を除かねばならぬ。また伊豆守の隠密とやらも捨て置くことはなりませぬ」

「ごもっともだ、私もそう心得る」

即座にこういったのは、先刻の頭巾をかぶった侍である。

「皆さんとても、無論のこと、御異議はないことであろう。話はその計略ですよ。どうなさる？ とにかく、この国内でことを計るのは……先夜の例もあるが、なかなか困難なのだが……」

「先夜の……」

不審そうに老人がこういって目を挙げたのは、正雪を要撃したことを知らなかったためであろう。五人いる中の三人までが、氣拙（きせつ）そうな笑いをうかべて顔を見合せ、その中の一人が、

「いや……」

と、話題を転じていた。

「やるとなればすな、やはり、国境の外へ出てからでしょう。

つまり、我々が勤めを捨て、どこまで行けるかということになるが、これは御心配なことじゃ、大坂まで出れば、腕の確な浪人者がいくらでもごろごろしているのですから、その連中を雇っては如何ですか？ 殊にわれわれの計画だということは極々内密にして置くのが肝腎かんじんなのですから」

「いいね、それで出来れば、これに越したことはない。しかし適当な人間を雇うことが出来ますか？」

「人間ならば、いくらでもいるのですよ。次第によっては、由比正雪の方は手前が全部お引受けすることにしても宜しい。ちょっと一日行つて然るべき男に話して帰つて来ればよいのですから。

その方は、いいのです。しかし、こちらの方は船で江戸へ送るとなると、どうしてもわれわれの手で始末しなければいけない、これが甚だ面倒なことです」

「そう……」

「誰か同志の者が一緒に乗込んで行けるといいのだが、これは今になつては無理でしょう。すると、船へ乗せるまでの勝負……ということになるが……」

と、話しはまた江戸の隠密、結城数弥の上に戻つて来た。

「思いきつて、やりますか？ われわれの手で。行くことはなるべく多勢で行つて、素早くやつて引払つて来る……どうも、これよりほかに方法はないようですが」

送り狼

川が、幅をひろくゆつたりと流れている。さっきから行く手の、暗い中にぼんやり霞んで黄ばんだ花をにじませているのが、湊みなと川口の燈明台であつた。紀の川はそこまで来て海へそそいでいるのである。この晩は海から来るなまぬるい風が、遮さやるもののない土手の上の道に埃をあげていた。

この男たちは無提灯で、黙々と歩いて来たのである。道の脇に何かの小さい社があつて樹木がこんもりしていると、ところまで来てから、土手を降りてその中に入つた。この松が風で鳴っている闇の中には、この連中を待っていた者がある。

「おい、ここだ」

といいながら、木の間から出て来た。二人、三人である。今来たばかりの者を合せて、七人が一団となつて、一昨日の夕方、江戸へ送られる結城数弥のことで密談をしていた顔触れに、二三の新規の人間が加わっていたのである。

「どうだった？」

と、待っていた方から尋ねたのに、答える方は、

「来る」

と、短く答えた。

「牢同心からじかに聞かせたのだ。船を出すのが真夜中だとい
う……」

「どうも感付かれたような気がするな。わざわざ夜にするとい
うのもおかしい」

「いや、そうでない」

と、いう者があった。

「夜を選んだというのは、やはり潮の加減なのだ。これが昼間に
されたら、まさか我々も手を出せないだろう。夜になったのは我
我の幸いと申してもよい。とにかく、誰か見張りに立っているこ
とにしよう」

一人がすぐ離れて土手へ登って行った。

ほかの者は、木の根に腰をおろした者があるのを見て、めいめ
いこれに倣^{なま}って、暗い円陣を作った。

「うまく姿をくらまして下さいよ」

と、白髪頭の老人がいった。

「仕事は簡単なのだが、これよりも逃げ方だからな。いざとなる
と、まごつくものだから……十分ぬかりなく」

「一体、どのくらい人間がついて来るでしょうか？」

といい出した者があった。

「それは、普通なら、同心くらいの者が一人に、あとは手先が三
四人くらいのもだろう。この人数で掛るのはすこし大げさすぎ
るくらいのものだが……村上や牧野なぞがいることだから、どん
な用心をしていないとも限らない。しかし、たかの知れたもの

さ。これだけで拔身をさげて押出したら、多分、一議もなく駕籠^{かご}
を捨てて逃げるだろう。……殊に、目あての男は駕籠から出られ
ぬようになっていいるのだから、誰でもいい、目的を遂げさした
ら合図をして、めいめいに散らばるのだ」

この話の間も一同の注意は、見張りに土手の上へ出ている男に
向けられていた。

「来たらしい、提灯が見える」

と、その男がいうのを聞いて、一同は思わず立上った。

老人だけが土手をあがって見に出て行った。あとの者が用意し
てあった黒い布で、すっかり覆面している中に、見張りの男も老
人も土手から降りて来た。

「来た。……人数は少くない」

という。

すぐに行動は起された。一同は木立の中から出て土手の蔭に潜
伏した。すこし首を出すと、土手の上を通っている道が見え、城
下の方から三つの提灯にかこまれて来る駕籠の姿が見えた。

人の話声がする。びたびたいう多勢の足音が近付いて来る。も
う提灯の灯影が土手の草に映るのが見えた。

「行けっ！」

と、誰かが叫んだ。一同は草をつかんで土手の上へ駆け上っ
た。早くも刀を抜き放っていた。

駕籠をかこんでいたのは、僅か五人だったが襲う方で予想して
いたほど驚きもしなかった。これは手先や同心ではない。揃いも

揃って大兵の見るからに悍しい侍たちばかりであった。それも襲った方から見ると、一目して新規に召抱えられた浪人組の者ばかりと知れる顔触れだった。

一度に立止って、

「なんだ？」

と、身構えながら睨み据えた。

こちらは、はっと思っていたのであるが、七人が七人とも思慮を残して引きさがる考えは浮かばなかったと見える。白髪の老人が何かいって遮ろうとしたが、ほかの者は日頃の憎悪の相手を目前に見て、ほかの場合よりも一層闘志を煽られていたのである。

無言のまま、突っ掛りそうな勢いで進んで行った。

出ると一緒に、その進路を遮って囚人の護衛の方でも一度に垣根のように並んで身構えた。

「何用だ？」

と、咎めて来た。

物もいわず、白刃が宙に閃いた。何か叫んだ声も次に起った足音も喚き声に消されていた。別れた時は双方が白刃を揃え、殺氣を含んで睨み合っていたのだ。

浪人組の男たちも、夥しい人数の中から選り出されただけあって腕ききが揃っていた、殊に肌に鎖襦袢を着ている者さえあったのは、この襲撃を予想していたものとも見えた。駕籠を囲んで、一步も近寄らせまいと身構えているのだ。駕籠は人足たちが逃げて、地面に置き去りになっていたのである。囚人の姿が黒く

見えているのである。

「囚人に用があるのだ。のけ」

と、僅かの間に、老人が刀身を振りつつ唳れ声を揚げた。無論のこと、嘲罵がこれに応じただけだ。

「慮外者！ お上御用を邪魔立てするか？……うむ、御譜代、古参の方々の腕前を拝見しようか」

寄せ手が一樣に、火がついたように、色めいた。真先に斬込んだのは、誰でもなくその老人だった。

相手は深く肩へ斬込まれて、どうと仆れた。老人とも思われぬ牙えた腕である。息をつく間も措かず、その隣にいた男の側面から斬掛けて行くのである。この刹那に敵が見せた混乱に乗じて、寄せ手はこそと斬り込んだ。誰よりもその老人が鮮かな働きを見せて、向う敵を受身の太刀に追い込んでいた。殆どその水際立った腕前に、敵わないのだった。知らぬ間に、浪人たちはさがっている。駕籠はもう、すぐ目の前にある。浪人たちは、ほとんど自分たちの軀でこれを蔽って、必死に防いでいるのだ。ただこれも何よりも名を惜しむ者たちと見えて、斬られてもこの場を去るまいとして、獅子奮迅の勢の敵と斬結んでいるのだ。寄せ手はもう駕籠へかかることも出来そうだった。その刹那に、浪人の中の一人が、鋭く斬り込んで来た老人の太刀をくぐって、左下から刀の長さ一杯に老人の胴をはらっていた。

老人は棒のように味方の足もとに転がった。それと見て守る側では、盛り返して斬って出た。寄せ手は混乱して、一問ばかり退

きながら、また踏み止まって、前よりも凄じい勢いで殺到して来た。その怒濤のような勢いの前に、浪人組の中の二人が斬り伏せられた。残る二人は、辛くも駕籠のところまで戻って、身構えたのである。

もう万事休したといってもよかった。二人だけ残った男は、どちらも鎖襦袢を着ていたのだ。そのお蔭で今までに仆れるほど深く斬り付けられなかったというものの、これまでも防ぎあぐんでいた敵を、自分たちだけではどうにも防ぎ止められる筈がなかったのである。二人が敵に後を見せなかったのは寧ろ悲壮であった。二人とも、囚人を入れてある駕籠に背中がつくばかりのところで踏み止まって最後の抵抗を試みていた。

「出してくれ。お手伝い申そう」

数弥が、身をもがきながら、こう叫んだのも、烈しい剣戟の音の中であつた。しかし不思議なことには、数弥の目の前で寄せ手の足並が急に崩れたことである。狼狽して逃げようと始めたことである。数弥を守って危うく見えた二人が逆に敵を追って出て行ったことである。はつきりと、数弥の耳に、段々近付いて来る馬蹄の音が聞き取れた。

これだ。誰か急を聞いて馬を飛ばして来たので、寄手は逃亡にかなかったのだ。

実際にこれはそのとおりであつた。馬に揺られて真先に来たのは、牧野兵庫だった。その次に真槍を抱えて馬を飛ばして来た者がある。すこし遅れ、提灯を振りかざして多勢で走って来たの

は、同心たちだった。

兵庫は、逃れる敵を追おうとしていた二人の者に、馬上から声をかけてとどめ、代りに同心たちに後を追わせて、自分は馬から降りて、地上に仆れている傷死者を見て廻った。兵庫が立ち止ったのは、あの勇ましかった老人の死体の前である。俯向きの死顔を提灯で照らして見て、

「矢内原……」

と思わず呟いた。

兵庫について来て、やはりのぞき込んだ人々も、その老人が誰かすぐ見て取っていた。この矢内原源左衛門ならば、駿河以来の家来で家老筆頭の真鍋氏の縁戚で家中でも重きをなしていた重厚な人物であつた。このひとが、この暴挙に加わっていたとは誰にも、かなり意外に感じられたことだ。

兵庫は無言で、そこから離れて、次の死者を見に行った。寄せ手の斬られた者は皆死んでいたのである。浪人組では一人が絶命していただけだった。

その頃には、続々と人が駆け集まって来ていて、その中には医者もいて怪我人に手当てした。数弥の駕籠は、すぐ別の者が護って、湊川口にいる船までとどけることになった。怪我人と死者を城下へ搬ぶのに、戸板も持ち出された。

兵庫は、ひととおりの指図を下してから再び馬に乗った。

土手道には風が吹いていた。遅れて駆けつけて来た人々が、ところどころ道をひらきながら、疾走して行く馬上の兵庫を見上